

「主を賛美せよ」詩編 117：1-2

木村一充牧師

先日、YouTube で東京大学の生命科学研究所の教授・小林武彦氏の動画を見る機会がありました。この先生は数年前、講談社から『生物はなぜ死ぬのか』という新書を出版し、話題になった方です。小林先生は「生物は死ぬことによって進化する」と言います。すべての生物は死を運命づけられていますが、それは“死ぬことによって次の世代が生きる”ためだということです。つまり、生物は次の世代がよりたくましく生きられるように、自ら死ぬことでバトンを渡すのです。「あらゆる生命は死ぬために生まれる」と、この先生は語っています。ここまで来ると、その話はまるで聖書の福音書が語るメッセージのようでもあります。

実際、小林先生は「私の話は、法話（仏教の真理を説く説法）として聞いてもらって構いません」とおっしゃっていました。なぜ生物は死ぬのか——その理由は、細胞内の DNA（デオキシリボ核酸）が、細胞分裂のたびに複製を繰り返す中で損傷し、正常な細胞を作れなくなるからだと、小林先生は説明されます。それが病気の原因にもなるのです。おそらく、その通りなのでしょう。生物の細胞は、いつまでも正常な細胞分裂を繰り返すことはできません。コピー機が壊れていくのに似ていますね。

この動画には、小林先生の講義内容をまとめ、話を進める役割の女性インタビュアーも登場します。彼女は、先生の話に耳を傾けつつ、疑問点や分かりにくい部分を質問しながら、話を深めていきます。その途中、彼女は次のような質問を投げかけました。「話は変わりますが、小林先生、人間にとって幸せとは何だと思われますか？」——人間も生物の一員として、他の生物と同様に死を運命づけられています。そうであるならば、人間にとって「幸せ」とは何なのか。誰もが聞いてみたい質問です。

この問いに対して先生は、こう答えました。「生命学者としての私から見れば、人間の幸せは、次のひと言に尽きます。すなわち、“その人が死から遠く離れていること”、“死の脅威から守られていること”——それが、幸せなことです」私はこの言葉に、大いに共感を覚えました。

本日の礼拝に集っている方々の中には、年齢を重ね、身体の衰えを感じている方もおられるでしょう。しかし、大切なのは“生きること”です。私たちは、自分に与えられた命を、そして他者の命を、大切にしなければなりません。それこそが、聖書の信仰に生きる者にとって、最大の務めであるのです。

考えてみれば、聖書は人間の死に対して、さほど関心を払っていません。たとえば、信仰の父と呼ばれたアブラハムの死の場面も、創世記 25 章ではこう記されているだけです。「アブラハムは、長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」——非常に簡潔です。モーセやダビデの死も、同様に

一節で報告されています。一方、新約聖書では、イエスの弟子であるペトロやパウロの死について、記述すらありません。聖書は、信仰に生きた者の死について、驚くほど無関心なのです。

ただし、ひとりだけ例外があります。それは、神の御子・イエス・キリストの死です。聖書が唯一詳細に描いている死の場面は、このお方の死のみです。なぜでしょうか。それは、聖書の教えが“信仰に生きる者の命の輝き”を強調する教えだからです。死とは、神との断絶を意味し、それはイスラエルの民にとって、礼拝の機会を奪われることを意味しました。神を礼拝し、神の御名を賛美すること——それこそが、イスラエルの民にとって“生きている証し”だったのです。ゆえに、聖書の民が死に大きな関心を払わなかったのは当然のことだったと言えるでしょう。

使徒パウロは「わたしにとって生きることはキリストです」（フィリピ 1:21）と書いています。パウロになぞらえて、私はこう申し上げたいのです。「私たちにとって生きることは、神を礼拝することです」

あるユダヤ教の神学者は、次のように述べています。「安息日は、私たちの偉大な大聖堂であり、ローマ軍もドイツ軍も焼き払うことのできなかつた神殿である。背教者ですら、この神殿を消し去ることはできない」——この安息日に礼拝をささげ、罪の赦しをいただき、神の息吹、命の霊を受けること。それこそが、私たちにとって他の何ものにも代えがたい祝福であることを、心に深く刻みたいのです。

本日の音楽礼拝では、菊池るみこさんをお迎えし、神を賛美するハンドベルの豊かな音色に耳を傾けました。お読みいただいた詩編 117 編では、詩人が次のように詠んでいます。

「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。

主の慈しみとまことはとこしえに、わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ」

詩人は、礼拝を通して主の慈しみとまことを受け取り、心から神をほめたたえています。信仰に生きることは、わたしたちの命を真に輝かせることのできるお方を信じて生きることです。この信仰に生きることを通して、格差と分断が深まる困難な時代の只中で、お互いの命を大切にしながら、「生きて、生きて、生き抜いて」まいりましょう。

お祈りいたします。